第Ⅱ部
人口減少社会の
淵源を遡れば

◇第Ⅱ部を構成する４章、５章、６章に用いる論考について◇

第Ⅱ部では、「はじめに」で述べたように、人口減少社会への転換を避け得なかった要因の淵源に遡って考察を進めることで、問題の根を掘り起こすことを試みる。そのために、人口減少時代への移行が明確になった 2005 年国勢調査を中心に、1990 年代から 2000 年代にかけて調査研究を進めた下記の 3 種の研究仲間との作品を取り上げる。

その一つは、「韓国における日本大衆文化の調査研究」をテーマに、1995 年度から 4 期 10 年にわたり文部科学省（文部省）科学研究費補助金を得て、韓国の李明熙公州大学校教授、夫伯慶熙大学校教授、佐本万理成均館大学校講師（ソウル大学校師範大学韓国語教育専攻博士課程在学）との共同研究の成果として発表した次の作品である。

「韓国と日本の少子・高齢化の進行に伴う社会システム再構築への課題－教育システムの問題を中心に」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第 39 号』2008 年 3 月　所収

その二つは、2000 年代に入って開始した秋田と沖縄での調査研究。秋田では 90 年代生活科誕生期以来の友人で公立中学校の濱田純校長（学力・学習状況調査開始時の秋田県教育委員会教育次長、現秋田大学教授）と高齢化率が非常に高い自治体の小学校での教育経験をもつ渡部和則教諭（現秋田市立金足西小学校）との共同調査。沖縄では琉球大学の西本裕輝准教授（現教授）と与那嶺涼子沖縄大学講師（現外務省女性参画推進室）との共同調査。この二つの調査を結んで、対照的な数値を示す両県の学力調査結果と年少人口数・率の比較共同研究の成果として著した次の作品を用いる。

「学力問題再考－秋田と沖縄の比較を通して－」『静岡大学教育学部研究報告・教科教育学篇№45』2011 年 3 月　所収

その三つは、金子書房の『児童心理』編集部の依頼により執筆した下記の論考３種。いずれも人生のパートナーである妻喜代子と 4 人の子どもたち（長男→長女→次男→次女の順）との日々の生活の場での逞しい共同作業から生まれた作品である

「高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ」『児童心理』1999 年 10 月号臨時増刊

「親が親になりきれない背景」『児童心理』2002 年 11 月号

「子育てが不安になる時代背景」『児童心理』2004 年 2 月臨時増刊

したがって、第 4 章は日本と韓国、第 5 章は秋田と沖縄、第 6 章は女性と男性の比較の観点から、人口減少の淵源（原因）を問い直す素材（触媒）として読み解いていただきたい。その作業に応えるために、若干の加筆修正を行ったが、文字や数値の誤謬の修正と説明不足の補充に止め、取り上げる事象とデータ、言及する論点と分析内容、開示する課題と問題に関する記述は、すべて発表時の叙述・描写を残した。人口減少が顕在化した 2005 年国勢調査にいたる日本社会の変遷過程の同時代史的語りとして、自らの経験と認識との対比とともに読み進めていただきたい。